

藤田湘子の三十句 野本京 選

令和七年一月一日（2025.01.01）

羽蟻の夜かなしき家を出て歩く 『途上』

山茶花やいまの日暮の旅に似て 『雲の流域』

胸の底わくら葉たまるためておく 『白面』

心づけばいつもひとりやはこべ萌ゆ

直視あるのみ夏は眞赤な花愛し

孔雀まで吹かれて來り春の暮 『狩人』

百本の桔梗束ねしゆめうつゝ 『春祭』

しだれつゝこの世の花と咲きにけり 『一個』

蠅叩此處になければ何處にもなし

死ぬほどの位もなくて早かな

物音は一個にひとつ秋はじめ

ふるさとの海は鳴る海蓬餅 『去来の花』

戦争が過ぎ風が過ぎにけり

泣かぬ子が泣く子離るゝお講風

秋風や書けば見えくるものの綾  
『黒』

をりをりの初心に秋はねこじやらし  
『前夜』

湯豆腐や死後に褒められようと思ふ

水母にもなりたく人も捨てがたく  
『神楽』

秋風のうしろへまはれしじみ蝶

ゆくゆくはわが名も消えて春の暮

闊歩して詩人にならうねこじやらし

梟が啼けば荒野へ還るわれ

全身にいま癌はなし楠若葉

死蟬をときをり落し蟬しぐれ

消えかかる身を白魚は寄せ合へり  
『てんてん』

時間からこぼれて冬のしじみ蝶

死者とまだ訣れてをらず白木槿

虎落笛わがのどぶえを誘ふなり

文藝に修羅無くなりぬみやこ鳥

木蓮の声なら判る気もすなり